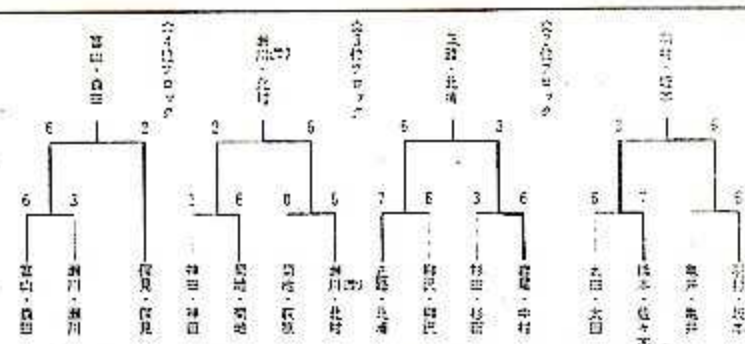




ミックスダブルスの楽しみ方

1月28日、春のミックスダブルス大会に出場しました。一昨年に続き、二度目の参加です。

猪戦の対戦相手は、Kさんチーム。日頃のバツナな練習

習ぶりが目に浮かび、内心「やられるかな。」と思いましたが、ところが対戦するうちに、Kさん、私よりあがつているのが、わかります。家内のバカ出来にも助けられ、勝たせてもらいました。

2戦目の相手は、温厚そうなO夫婦チーム。「これはいけるかな。」と思っていたら、黄金のバックハンドであっさり片づけられてしまいました。家内いわく「お父さんが悪い。」だそうです。

連盟の試合は、ミックスダブルス戦でも、勝負への緊迫感がいっぱいですね。何度も作戦を耳打ちしあっている人、ミスするたびに謝っている人、調子が悪くて暗くなっている人とさまざまです。

ミックスダブルスは、作戦がなかなか難しいと思います。勝つために女性ばかりをねらうわけにもいかないし、かといって男性の方はかりに球を集めていては勝てません。

男性にとっては騎士道精神が試される時かもしれません。ところで、今はテニスブームの全盛です。どこのテニスコートを見てもロングヘアのギヤルがラケットを持って



飛び跳ねています。しかし、今日はあのギヤルたちはどこへ行ってしまったのでしょうか。

緊張感あふれる試合もいろいろと、たまには「ナイスボレー！」なんてギヤルをほめながら試合がしてみたい。と、こんな事を考えるのは、私がおじさんの仲間入りした証拠かもしれませんね。

いずれにしても、いつも大会運営でご苦労されている連盟の役員さんたち、大変御苦労様でした。特に、お昼に美味い豚汁をごちそうになった元ギヤルのみなさん、お世話さまでした。

来年も、参加させていただきま

大島からの手紙

秋川の皆さんへ

昨年十一月にあった秋川オープンに速く大島から参加して下さいました。高橋憲司さん（通称 先生）が連盟ニースに投稿して下さいました。ここにも書いてあるように大島と秋川のつながりをこれからも絶やすことなく、続けて行くべきだと思います。

私は現在大島で教員をしている者ですが、暇を見てはテニスをしています。学生時代は、テニスが好きだったのですが、今は一番の楽しみになっています。大島でのヒップティングパートナーといえはまず秋川の方々の中でこんな有名な人とは知らなかったアキラ君、そして姉さんのミカちゃん、他は教員仲間のみと、いう極限られた人達だけです。そんな中、今年の春に大西さんからの誘いで、秋川の方々の合宿に参加させていただきました。そこで初めて秋川

と大島のとても素晴らしい友好関係を知りました。現在大島で大西さんが先頭に立ち、テニスをさかんに行うと一生懸命頑張っているらしいですが、閉鎖的になりがちで、大島市との交流は大島町にとって非常に難しいことではないかと思っています。

また、今回は招待選手ということで試合に出場させていただけにありがとうございます。大会の規模の大きさを、広域からの参加者、個人個人のプレーヤーのレベルの高さ、大会の雰囲気、それぞれが大島にとってのうらやましいものに感じました。そして、この連盟ニースといういろいろなイベントなども素晴らしいと思いました。個人的な話ですが、今回の大会では、偶然中学時代の友人や大学でテニスをしていて対戦相手であった方などに会い驚き、改めてテニスをしていたことがあったなあと感心した次第です。

最後になりましたが、秋川市テニス連盟の今後の益々の発展をお祈りし、また大島町との今までの以上の交流をお願いして、終わりたいと思います。

私とテニス

田代 道雄

「よし、チャンスボールだ」一瞬肩の力を抜いて、ラケットを耳の後ろにつく。放物線を描いて落下してきたボールと、振り出したラケットのタイミングがぴたりとあった。「バシッ」センターマターメがけて一直線にボールが突き刺さる。「ナイスショット」実にいい気持ちだ。

竹刀をラケットに握りかえてから三年と数ヶ月が経過した。今仕事の次に熱中しているものといつてよいだろう。

職場の同僚にすすめられたのははじめたきっかけで、最初は重々しい気持ちでコートに向かったものだ。テニスそのものに対する偏見があったし、新しいことをやり始めるというのはけっこう勇気のいることである。それでも球技には多少の自信があったので、簡単にできるだろうと考えていた。

ところがである。「ボールをラケットにあてさえすればよいのだ。野球より楽さ」といった軽い気持ちで、コートに立った直後、その予想外の

難しさに愕然とした気持ちに変わっていくのであった。とにかくラケットにあたらないうなせなんだ。はずかしさと同じに、やさしさがこみあげてきた。徹底的に練習してうまくなりたいたい……(この時、コート上で自由自在にボールを操る自分の姿を脳裏に描いていた)。

これが私のテニス初体験日であった。

それから一年半ぐらい、週二日テニススクールで学んだ。すぐにゲームができなくてもいいから、とにかく基本だけはしっかり身につけようと考えた。

はじめはフットハンドのストロークだった。空振しても日ごとにボールがラケットの近くを通過するようになり、三ヶ月後には、バックハンドのドライブが打てるようになった。一年たつと、ホームランストローク、フレイムボレ

も少しづつ消えていった。しかし順調に身につけていったわけでもなく、途中やめようと思ったことは何度もあった。もうこの日でおしまいと決心した時、自分でもびっくりするようないいショット

がきまったりするものだからいけない。回りの人達におだてられるものだから、ついやっぱりもう少しやってみるかと思えるのである。つくづく単純な人間なんだと思ってしまう。

スクールに入ってから上達している。少しテニスが上達したと同時に、教わる立場の気持ちがよく理解できた。子供の学習指導、進路指導が私の仕事なので、仕事上とてもよい刺激になった。思っている。ほんの小さなアドバイスや励ましが、タイミングよくなされるのであれば、落ちこんでいる生徒を生き返らせ、やる気にさせてしまふものだということを身をもって体験した。なぜかそれ以来、私の授業はテニスコーチのような口調になり、生徒が正しい答えを言うならば、即座に「ナイス」が出てしまふ。

秋川テニス連盟に加入したのはその後である。とにかくゲームをやってみたかった。失礼であるが、はじめて連盟の練習を見た時の感想は、あまりレベルは高くないなというものであった。しかしそ

れは見当りがいいであった。自分のテニスに対する能力のなさをよく感じた。実にうまかったのである。

経験豊かなおじさま、おばさま(あついけねえ、おねえさま)方の、ボールを右に左にと巧みにさばくありさまをゲーム中にとくと拝見させられた。女だからといってなめてかかるのはとんでもないことだった。恐怖のオパタリアンである。若い男は、じわりじわりと料理される。「あらごめんなさいね。いただきよ」といいたが、すばらしいショットをコナーというばいのところを決めるのだから、たまたまのものではない。こういう女性はいいていご主人もうまく、朝も夜も二人してテニスの研究に余念がないのではないだろうか。私もテニスのできる人をお嫁さんにしたいと思っている。夫婦で共通の趣味を持つということは良いことである。

とにかく、これから一つ一つその老練な技をぬすんでいき、いつか仕返しをしたいと思っている。趣味は娯楽性の高いもの、鍛錬的なもの、教養的なもの、

と三つのタイプに分けられると思う。スポーツは鍛錬的なもので、テニスも当然その中に入るであろう。私が四年前までやっていた剣道がそうであった。

しかし、これからの私にとって、テニスはどちらかというと娯楽的なものに近づいていくのではないかという気がする。ただ誤解してもらいたくないのは、決してテニスを軽く見ているのではないということだ。その奥の深さ、楽しさ、面白さは少しずつ理解してきているつもりだ。ただ楽しむというだけのものではないということを強調したい。テニスを通して他分野の様々な人と知り合い、自分の世界を広げていく、また職場の人間関係をスムーズにする潤滑油的存在としての意義もあると考えている。

まだまだ未熟者で、学ばなければならぬことは数多くあるわけだが、焦らず、マイペースで続けていこうと思っている。

私はテニスから「なんでも挑戦する勇氣をもつことの大切さ」を教わった。心からテ

